

## 開花期以降の干ばつ対策と病虫害防除

### ★POINT★

- ・開花期以降の干ばつは収量・品質の低下を招くので、暗きょ閉栓やうね間かん水（または「明きょかん水」）による対策を実施しましょう
- ・ほ場ごとに開花期を確認して適期に病虫害防除を実施しましょう。

### 1 開花期以降の干ばつ対策

#### (1) 干ばつの影響

7月下旬から8月下旬は、大豆の開花期から子実肥大初期に当たり、葉面積が大きい  
ため蒸散量が多く、大豆生育期間中で最も水分要求量が多い。この時期に土壤水分が不  
足すると、落蕾、落花、落莢が多くなり、稔実莢数が減少するだけではなく、子実の肥  
大にも影響し、収量・品質の低下を招く。

#### (2) 干ばつ対策

##### ア 暗きょの閉栓

梅雨明け以降は、基本的に暗きょ栓を閉じる。ただし、降雨等により地下水位が上  
昇した場合は速やかに暗きょ栓を開放する。

##### イ うね間かん水の実施

###### ○ うね間かん水が可能なほ場条件

- ・本暗きょや補助暗きょ、周囲明きょなど排水対策が十分に施されており、夕方か  
ん水を開始して朝にはうね間に水が無い状態が可能なほ場

###### ○ うね間かん水実施のめやす

- ・1週間程度降雨の無い日が続き、大豆の上位葉が反転した頃。日中は太陽光によ  
って葉が向きを変え、判定が難しいので葉の観察は朝や夕方に行う。
- ・開花期以降ほ場を観察し、実施を検討する。



最頂葉中央の個葉が直立する



ほ場で葉の裏面が目立ってくる

○ うね間かん水の方法

- ① 水尻側のうね間まで水が行き渡る程度にかん水する。
- ② ほ場に水が行き渡ったら水尻、暗きよ栓を開け、速やかに排水する。  
※かん水は高温時に行うと根を傷めるので、朝や夕方など涼しい時間帯に行う。  
※長時間水がたまると、湿害や立枯れ性病害を助長するので注意する。  
※大区画ほ場では数日に分け徐々にかん水し、湿害のリスクを軽減する。

ウ **明きよかん水**

水量が確保できない、湿害が不安等、うね間かん水の実施が難しい場合は周囲明きよに水を溜める「明きよかん水」を実施する。

○ 明きよかん水の一例

- ①水尻と暗きよを閉め、周囲明きよにかん水し、明きよに水がある状態を2～4日程度保つようにかん水を続ける。
- ②かん水後1日～数日、水尻と暗きよは閉めたままにする。
- ③気象予報等を参考に、1週間程度降雨が見込めない場合は再度かん水する。

## 2 病虫害防除

大豆の基幹防除は、以下の2体系から一方を選択し、必ず実施する。

表 基幹防除体系

体系例	防除時期		
	開花期 3 週間後頃	開花期 4 週間後頃	8 月第 5 半旬～ 9 月上旬*
紫斑病防除 1 回体系	—	紫斑病＋子実害虫	子実害虫(マメシクイガ)
紫斑病防除 2 回体系	紫斑病	紫斑病＋子実害虫	子実害虫(マメシクイガ)

\*薬剤の種類によって防除時期が異なるので、県農作物病虫害雑草防除指針（以下、「防除指針」）を確認の上、薬剤に合わせて適期に防除する。

### (1) 紫斑病防除

1回防除体系の場合は、防除効果の高い薬剤を使用し開花期4週間後頃に散布する。生育が旺盛なほ場では、下位葉・莢まで確実に薬剤が付着するよう、丁寧に散布する。

### (2) マメシクイガ

薬剤散布適期は産卵盛期～ふ化盛期の9月上旬頃がめやす。

前年に被害が発生したほ場や、8月後半以降に平年と比べて低温となる予報が発表された場合など、多発生が予想される場合は、防除指針に従い特に丁寧な防除を徹底する。

### (3) ウコンノメイガ ※発生状況を見て防除

7月第5半旬の畝1m当たりの平均葉巻数を6個以上確認したときは、防除が必要。

老齢幼虫は薬剤防除の効果が劣るので、早めにほ場を見回り、葉の半分程度まで巻いている葉（中齢幼虫の葉巻症状）が散見され始める時期に防除する。

幼虫の生育  
ステージと  
葉巻症状



孵化直後



若齢～中齢



老齢